



日本銀行金融研究所  
Institute for Monetary and Economic Studies,  
Bank of Japan

# 金研ニュースレター

2021年12月

金融研究所 (Institute for Monetary and Economic Studies, IMES)は、1982年10月に日本銀行創立100周年を記念して、日本銀行の内部組織の1つとして設立されました。金融研究所は、金融経済の理論、制度、歴史に関する研究を行っているほか、金融経済に関する歴史的資料の収集・保存・公開を行っています。

## ハイライト

貨幣博物館 テーマ展  
渋沢栄一にまつわるお金の話

- ✓ 一橋家の仕官とお札の発行
- ✓ 太政官札の活用
- ✓ 「円」の誕生
- ✓ 第一国立銀行の設立
- ✓ 辰野金吾との関わり
- ✓ 渋沢敬三と貨幣博物館

「金研ニュースレター」は、日本銀行金融研究所が主催するイベントなどを、幅広い読者を対象に、タイムリーにお知らせすることを通じて、金融研究所の活動を紹介することを目的としています。

## 貨幣博物館 テーマ展

### 渋沢栄一にまつわるお金の話

2024年度上期を目途に、新しい日本銀行券が発行される。そのうち一万円券は40年ぶりに肖像が変わり、渋沢栄一となる。

渋沢栄一(1840-1931年)は一橋家、大蔵省に仕官し、そして第一国立銀行の頭取を長く務め、どの時代においてもお金の発行に深く携わった。



テーマ展ポスター

貨幣博物館では、テーマ展「渋沢栄一にまつわるお金の話 ―第一国立銀行紙幣発行までのあゆみ―」を開催している。〈会期 2021年9月11日(土)～2022年1月16日(日)〉

ニュースレターでは、展示概要を、関連する渋沢栄一の回想などの資料を交えて紹介する。

### 【一橋家の仕官とお札の発行】

渋沢栄一は、1864年から一橋家に仕え、財政を立て直すため1865年に領地を巡り、播磨の特産品である木綿に注目した(栄一25歳)。良質の木綿を生産者から高く買い付け、大坂・江戸で直接販売することを考え、資産家が多くて水運の便も良かった今市村(播磨国、現兵庫県高砂市)に「産物会所」を開設した。

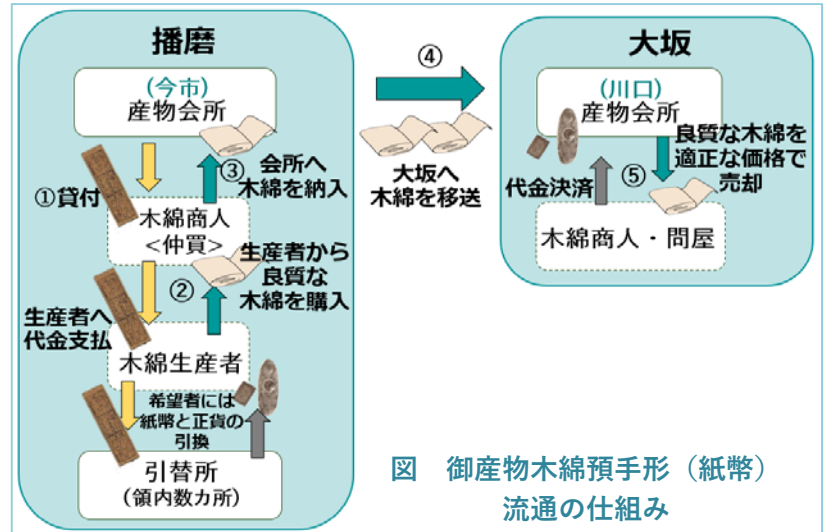


図 御産物木綿預手形（紙幣）流通の仕組み

栄一は、「産物会所」を発行元とし、地域で使える紙幣「御産物木綿預手形」を発行し、仲買に貸し付け木綿売買をしやすくなるようにし、地域経済の活性化と財政の立て直しを図った(右上図参照)。

近隣の藩でも類似の紙幣を発行していたが、額面割れして流通が滞っていたため、栄一は紙幣の発行にあたり、地元や近隣の裕福な農商から6000両以上の出資を得て幕府発行の貨幣(正貨)との引換が滞らないようにした。彼らが会所の役職についたことで、紙幣の信用も高まり、額面通りに流通したという。こうして紙幣発行を活用した殖産興業政策は軌道に乗った。栄一は後年当時のことを以下のように回想している。

「元来自分は斯様な事に付ては、其時分には別に学問も経験もなく、又外国の紙幣取扱方を聞いたこともなし、謂はば腰だめの考案であつたが、今日から思つて見れば、此の時の考案は経済の道理に暗合して居たので、即ち紙幣は此の如き効能をなし、又此の如き過ちを生じ易いものであるから、其効能を取つて過を避ければ、真誠なる紙幣使用の実益を得るものである」<sup>i</sup>。

またこうした取り組みを受けて、隣の摂津国の一橋領でも1866年に「御産物木綿預手形」が発行された<sup>ii</sup>。

### 【静岡藩仕官時代 太政官札の活用】

幕臣としてパリ万博に参加し、1868年にフランスから帰国した栄一は静岡藩への仕官を命じられた。この時期、明治政府は太政官札(全国通用の不換紙幣)を発行し、財政資金の補填や殖産興業資金の供給(勸業貸付け)を行っており、石高に応じ勸業貸付けを受けた各藩は、これを元手に事業を行っていた。藩出資による商法会所(後に常平倉)を設立し頭取となった栄一は、政府から静岡藩へ貸付けられた太政官札の活用策を講じた(栄一29歳)<sup>iii</sup>。



御産物木綿預手形 1865年  
所蔵資料の全額面を本テーマ展で展示。なお、古貨幣・古札統合データベース(東京大学経済学図書館)にも画像を掲載。



政府紙幣 太政官札 1868年

栄一は不換紙幣であった太政官札の価値下落を予想し、藩の太政官札を使って、東京で肥料を、大阪で米を購入したという。このときのことを後年、以下のように回想している。

「一般の人心が紙幣に習慣せぬのと、新政府に安心が薄いといふ情態とで、大きに其価格は低落したけれども、将来を予想してみるのに終には此の紙幣流通の為めに、諸物価は却て騰貴を示すに相違ないから、今の内に早く此紙幣を正金に交換して、物品を買入れて置くが利益が多からう」<sup>iv</sup>

このように政府からの貸付金や商人の出資を運用し、殖産興業をはかった常平倉が軌道に乗った頃に、栄一は大蔵省へ出仕することとなった。

### 【大蔵省仕官時代「円」の誕生】

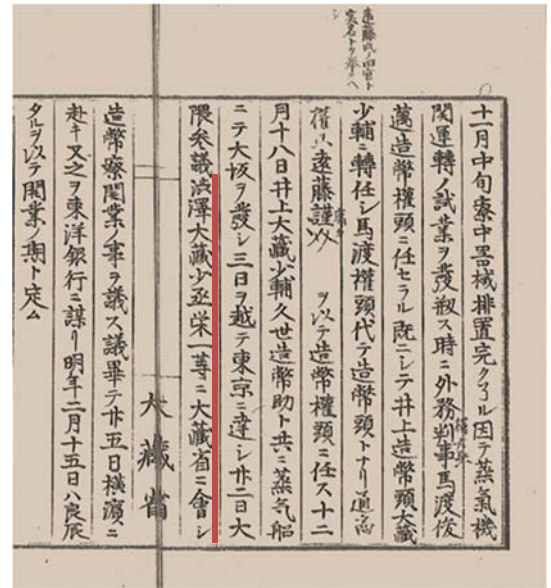
1869年末から政府へ仕官した栄一は、明治政府の租税・貨幣・銀行・郵便などの新しい制度の立ち上げに関与した。貨幣制度については、大隈重信・井上馨の下で新しい制度の立案に携わった。新しい貨幣単位「円(圓)」を定めた「新貨条例」が1871年に公布された際には、新しい貨幣と旧金銀貨との交換、各藩などで発行された大量の藩札の交換について、実務的なルール作りに尽力した(栄一31歳)。

なかでも藩札の引き換えルール作りについては、「藩々金穀の取締から負債の高、藩札の発行高、又は租税徴収の方法、其他、各藩に於て種々施設中に属する事業の始末等までも関連して居て、なかなか面倒のもの」<sup>v</sup>であったことを後年回想している。



東京名所 海運橋五階造真図 東京三井組ハウス

兜町・海運橋の袂に三井組の新たな拠点として竣工(1872年)。三井組の大番頭・三野村利左衛門が計画していた銀行としての利用が展望されていた。五層の和洋折衷建築の頂上部には、「三井組」の旗が描かれている。



栄一が大蔵省で造幣寮開業の準備会議(1870年12月)へ出席したことを示す記録

貨幣博物館所蔵『貨幣改造起源』より (3-2-A1-22/1)

藩札の新貨幣との引換価格

金一両札		銀一匁札		銭百文札	
藩名	引替価格	藩名	引替価格	藩名	引替価格
尼崎	1円	津	1銭6厘	尼崎	8厘
米沢	1円	大垣	1銭4厘	豊橋	8厘
富山	98銭	山口	1銭3厘	榎羅	8厘
松代	88銭9厘	郡上	1銭	平戸	8厘
彦根	80銭8厘	舞鶴	7厘	安中	7厘
高崎	71銭4厘	広島	4厘	千束	7厘
郡上	66銭7厘	姫路	3厘	金沢	5厘
弘前	53銭3厘	鹿児島	3厘	大聖寺	4厘
高知	33銭3厘	福井	2厘	高知	3厘
鹿児島	32銭2厘	宇和島	1厘	鹿児島	3厘

『図録日本の貨幣』第7巻より作成

### 【三井組と栄一の関わり】

江戸幕府の頃から両替屋として幕府の金融も担っていた三井組は、その信用力により、栄一が発行準備に関わった政府紙幣(1871年大蔵省兌換証券、1872年開拓使兌換証券)の発行を委託されていた。

一方で三井組は、1871年、自らが紙幣発行の権限を有する銀行の設立を政府に申請し、その頃英国流の中央銀行制度の設計を考え始めていた政府に一旦は認められ準備を進めた。しかし、政府が米国流の「国立」銀行制度(国法に基づく民間銀行)の創設へと方針を転換したため、設立は見送られた。栄一は大蔵省で国立銀行制度の制度設計に携わり、1872年に国立銀行条例が制定された<sup>vi</sup>。

## 【第一国立銀行の設立と銀行のネットワーク化】

栄一は1873年5月、井上馨とともに政府に辞表を提出し(栄一33歳)、その後再び官職に就くことはなかった。

国立銀行制度の発足にあたり、三井組と小野組に働きかけ、1873年7月に共同経営による第一国立銀行の開業にこぎつけた。設立当初は、三井八郎右衛門と小野善助の二人が頭取に就任し、栄一が「総監役」として全体の業務を監督したが、1874年の小野組の破たんを機に1875年に栄一が頭取に就任した。

後に栄一は、第一国立銀行の創立事情について、「私が(政府を)辞すると同時に是等の人から御辞職なすつたことは御気の毒であるけれどもそれを幸ひに一つ銀行を世話をし呉れまいか、斯う云ふ相談が起つた、それは願つたり適つたり入つてやつて見たいと云ふことは自分が希望して居るのだ」と述べている。また自身が「総監役」となった経緯について、「三井と小野と互格だから」二人を頭取とすることになり、「だから物を判断することが出来ないのだから私が総監役と云ふ位地に立つて双方を纏めて漸く銀行が成立つた」と振り返っている<sup>vii</sup>。



第一国立銀行紙幣 1873年発行  
加筆修正された 頭取「澁澤栄一」

国立銀行紙幣には当初の頭取名(三井または小野)が刷られており、後から栄一の名が朱書きで加筆修正された。



開化名勝園之内 東京海運橋第一国立銀行

三井組が設立準備を進めていた銀行の建物は、栄一の働きかけにより設立された第一国立銀行本店として譲渡された。掲げられている旗の模様は、第一国立銀行・第一銀行の社章として長く用いられた。



栄一が設立に関与した国立銀行が発行した紙幣

1876年に国立銀行条例が改正され、国立銀行紙幣の正貨との兌換義務が撤廃されると、全国的に国立銀行の設立が相次いだ。栄一は、自らの大蔵省時代の国立銀行制度の起草の経験や銀行経営の経験をもとに、各地の国立銀行の設立と運営を援助した。

第一国立銀行は、後続して設立された国立銀行の発起人や行員に対し、行内規定や銀行実務に関する指導を行い、開業後は、銀行間の送金網の構築などを通じて各国立銀行の業務を支援した。

また栄一は、銀行間の親睦を図り、情報交換を行うとともに、政府に対して共同で提言を行うため、同業者に呼びかけて1877年に摂善会を設立した。1880年には摂善会を改組して、東京銀行集会所を設立しており、これが現在の全国銀行協会の始まりとなった。1885年、辰野金吾によって新築された集会所の竣工式で、栄一は「遂ニ此集会所ヲ新築シテ、本日開場ノ典ヲ挙クルニ至リシハ、独同業者ノ為ニ賀スル而已ニアラス、之ヲ商業世界ノ幸栄」と述べている<sup>viii</sup>。

## 【渋沢栄一と建築家・辰野金吾】

辰野金吾による東京銀行集会所(1884年に銀行集会所と改称)の建築以降、栄一は兜町のヴェネツィアン・ゴシック様式の私邸、2代目の第一国立銀行本店を辰野金吾に依頼するなど、さまざまな形で辰野金吾と接点を持った。



渋沢栄一邸(中央)と栄一が頭取となった第一国立銀行(右)  
江戸橋ヨリ錠橋遠景

中央の栄一邸は辰野金吾設計による(1888年竣工)。本邸宅には舞踏室が設けられるなど、迎賓施設としての色彩が強かった。栄一はこの日本橋川、兜町一帯をヨーロッパの交易都市になぞらえ、一大ビジネス街へと発展させる構想を持っていたとされる。



辰野金吾設計 銀行集会所 1885年竣工

栄一は、東京銀行集会所の新築設計を1883年工部省営繕課に依頼し、イギリス留学から帰国し工部省に着任した建築家・辰野金吾(1854-1919)が手がけた。栄一が本拠とした兜町の隣町・日本橋区坂本町に建てられた。竣工式で辰野金吾は「外構ハ彼伊国造家学士パラテヨ氏ノ新式ヲ模範トス」(パラテヨ=16世紀イタリア人の建築家パツラーディオ)と述べている。

栄一は、自身が創設した銀行集会所での議論により「東京手形交換所」を1887年に設立した(栄一47歳)。東京手形交換所は、当初は銀行集会所の中にあっただが、その後1896年に竣工した日本銀行本店本館内へ移転し、さらに1898年に竣工した南分館の2階に移転した。これらはいずれも辰野金吾の設計による建築物であった。



日本銀行本店に移転した東京手形交換所

栄一は手形交換所移転にあたっての通知で、「日本銀行本館内の手形交換所にくる時は下駄ではなく、靴を履くよう」述べている。

## 【おわりに 栄一の孫・敬三と貨幣博物館のコレクション】

栄一は1913年、第7代日本銀行総裁・高橋是清から後任として日本銀行総裁への就任を要請されたが、長年民間の銀行・企業へ尽くしてきており、「四十年来之宿志今更変更難」として就任を固辞した<sup>ix</sup>。

その約30年後、栄一の孫・渋沢敬三が第16代日本銀行総裁(1944.3-1945.10)に就任した。渋沢敬三は民俗資料の収集・研究家でもあり、文化財の保護に理解の深い人物であった。現在の貨幣博物館の所蔵資料の中核である「銭幣館コレクション」は、渋沢敬三総裁の時に受け入れられたものである。日本銀行に来た時から「日銀に金融図書館と貨幣博物館を併設したい」という思いがあったことを後に述べている<sup>x</sup>。



渋沢敬三(1896-1963年)

日本銀行が「貨幣館コレクション」を受け入れてから約40年後、日本銀行100周年を機に1985年に貨幣博物館が開館した。そして、さらに40年あまり後の2024年、渋沢栄一が肖像となった日本銀行券・一万円券が発行される。

渋沢敬三は、「藩札も貨幣館には数万枚あり、中には珍品もかなりあるが、これらも一様には論じえないので、時期、地域、藩の性格や、経済構造、ひいては民衆の心的状態等、社会経済史的研究にとっても重要な手懸りとなる資料であろう。(中略)貨幣にジックリといどむ学究の出現を期するのも夢の一つである」と述べている。

この夢は金融研究所貨幣博物館として実現し、様々な企画展やデータベース公開、歴史研究など今に引き継がれている。

\*本号の執筆は関口かをりが担当した。

<sup>i</sup> 渋沢栄一述『雨夜譚 渋沢栄一自伝』1887年(『渋沢栄一伝記資料』第一巻、p.370、1955年)。一橋家時代については以下を参照。高砂市史編さん専門委員会『高砂市史 第五巻、史料編 近世』、2005年、pp.517～524。高砂市史編さん専門委員会『高砂市史 第二巻 通史編近世』2010年、pp.869～876。また展示全体を通して『渋沢栄一伝記資料』(渋沢青淵記念財団竜門社編、渋沢栄一伝記資料刊行会、1955～1971年)、武田晴人『渋沢栄一：よく集め、よく施された』(ミネルヴァ書房、2021年)などを参照。

今市村で発行された当館所蔵の御産物木綿預手形は、「古貨幣・古札統合データベース」(東京大学経済学図書館、[https://www.i-repository.net/il/meta\\_pub/G0000381kahei](https://www.i-repository.net/il/meta_pub/G0000381kahei))

右上の「キーワード」検索で「播磨国 今市 御産物木綿預手形」で検索すると当該資料がリストアップされる。

- <sup>ii</sup> 中川博勝「一橋家御産物木綿預手形について―摂津領における―」『茨木市立文化財資料館館報』3、2017年
- <sup>iii</sup> 龍沢潤「静岡藩商法会所の設立について」『白山史学』37、2001年。貨幣史全般については、主として『図録 日本の貨幣 7』(日本銀行調査局編、東洋経済新報社、1973年)を参照。
- <sup>iv</sup> 渋沢栄一述『雨夜譚 渋沢栄一自伝』1887年(『渋沢栄一伝記資料』第二巻、p.95、1955年)
- <sup>v</sup> 渋沢栄一述『雨夜譚 渋沢栄一自伝』1887年(『渋沢栄一伝記資料』第三巻、p.197、1955年)
- <sup>vi</sup> 第一国立銀行については、『渋沢栄一伝記資料』以外、主として以下を参照。加藤俊彦・大内力『国立銀行の研究』勁草書房、1963年、第一銀行八十年史編纂室編『第一銀行史 上巻』1957年、鎮目雅人「渋沢栄一と国立銀行：近代日本の経済発展を支えた金融インフラ」『月刊資本市場』429、2021年。
- <sup>vii</sup> 『竜門雑誌』253号、1909年6月(『渋沢栄一伝記資料』第四巻、p.50,51、1955年)
- <sup>viii</sup> 『銀行通信録』1、1885年12月(『渋沢栄一伝記資料』第六巻、pp.103～105、1956年)、『銀行通信録』31、1901年1月(日本銀行調査局編『日本金融史資料 明治大正編』第十二巻、口絵、1959年)。
- <sup>ix</sup> 渋沢栄一書翰控 高橋是清宛 1913年2月(『渋沢栄一伝記資料』第五十巻、p.289、1963年)
- <sup>x</sup> 渋沢敬三「日銀収蔵貨幣標本のいささつ」(渋沢敬三著；網野善彦[ほか]編『渋沢敬三著作集 第三巻』、pp.547～549、平凡社、1992年)

貨幣博物館「渋沢栄一にまつわるお金の話」は、貨幣博物館ホームページにワークシートと動画ミニギャラリートークも掲載しています。会期終了後もお覧頂けますので、併せてご覧ください。



金研ニュースレター 2021年12月

※本誌に関する照会は、日本銀行金融研究所までお寄せください。

無断での転載・複製はご遠慮ください。

日本銀行金融研究所 (IMES)

〒103-8660 東京都中央区日本橋本石町2-1-1

TEL: 03-3279-1111 (大代表)

FAX: 03-3510-1265

E-mail: imes.journals-info@boj.or.jp

ホームページ: <https://www.imes.boj.or.jp/index.html>

※日本銀行金融研究所による最近の研究成果物については、以下をご覧ください。

## 日本銀行金融研究所による最近の研究成果物

### 金融研究所ディスカッション・ペーパー・シリーズ

- No. 2021-J-12 「情報セキュリティ・シンポジウム(第22回)の様様:スマートフォンの利用にかかるセキュリティ」、2021年12月
- No. 2021-J-11 有賀涼、五島圭一、千葉貴司、「CO<sub>2</sub>排出量と企業パフォーマンス:Double Machine Learningを用いた日本の実証研究」、2021年12月
- No. 2021-J-10 加藤達也、「日本企業によるNon-GAAP指標の開示に関する特性分析:IFRS任意適用企業を対象とした検証」、2021年11月
- No. 2021-J-9 大島祐也、中久木雅之、「CSRに関する研究のサーベイ:CSR基準の統一化・開示の義務化の観点から」、2021年11月
- No. 2021-E-11 “Parameter Uncertainty and Effective Lower Bound Risk” by Naoto Soma, November 2021
- No. 2021-J-8 田村裕子、「チャージ型決済の実現方法とそのセキュリティについて」、2021年9月
- No. 2021-J-7 豊蔵力、「暗号資産の保有に係る会計上の取扱いに関する考察—会計マナー・ツリーを用いたアプローチから—」、2021年9月
- No. 2021-E-10 “The Power of Central Bank Balance Sheets” by Athanasios Orphanides, August 2021
- No. 2021-E-9 “Monetary Policy over the Lifecycle” by R. Anton Braun and Daisuke Ikeda, August 2021
- No. 2021-J-6 神尾英克、森田泰子、「1960年代末における国際収支に対する認識と金融政策:金融政策の転換前後における日本銀行の視点を中心に」、2021年8月

### 金融研究 第40巻第4号 (2021年10月発行)

- 「2021年国際コンファランス『ニューノーマルへの適応:COVID-19後の展望と政策課題』議事要旨」
- 黒田東彦、「2021年国際コンファランス『ニューノーマルへの適応:COVID-19後の展望と政策課題』開会挨拶」
- 山内利宏、「スマートフォン端末におけるセキュリティ上の脅威と対策:権限昇格攻撃と悪性ウェブサイトへの誘導に焦点を当てて」
- 宇根正志、菅和聖、「量子コンピュータ開発の進展と次世代暗号」
- 王悠介、川上淳史、畑山優大、古田早穂子、「スパース推定を用いた新しいヘドニック法について」
- 井上萌希、川上淳史、高川泉、中野将吾、増島綾子、武藤一郎、「財・サービス価格の統合:わが国におけるFD-ID型物価指数」